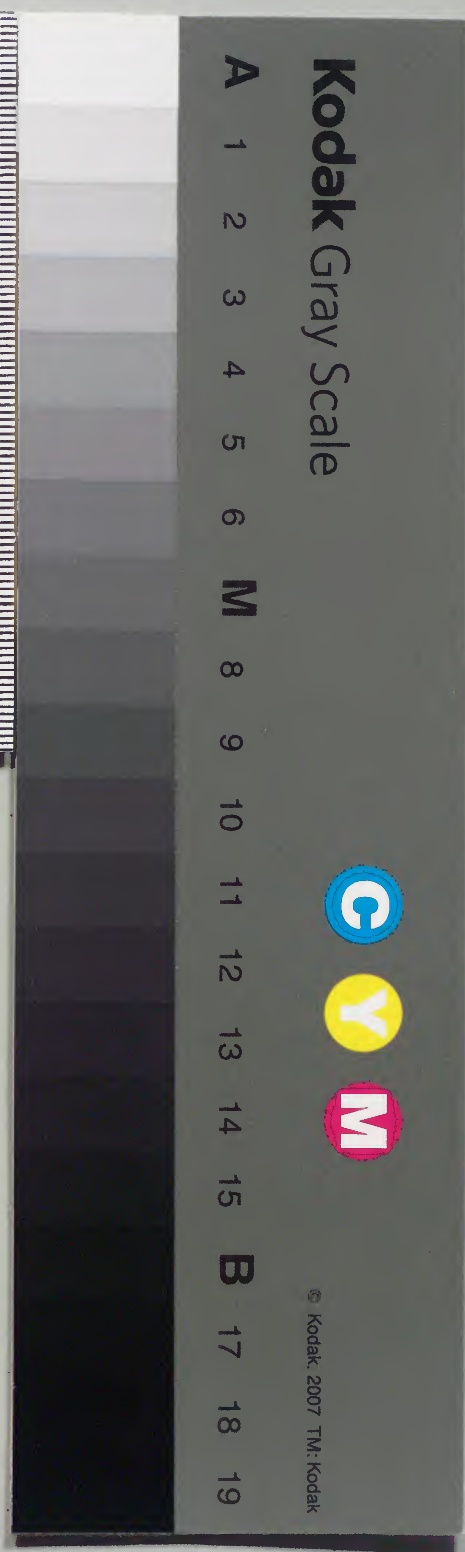
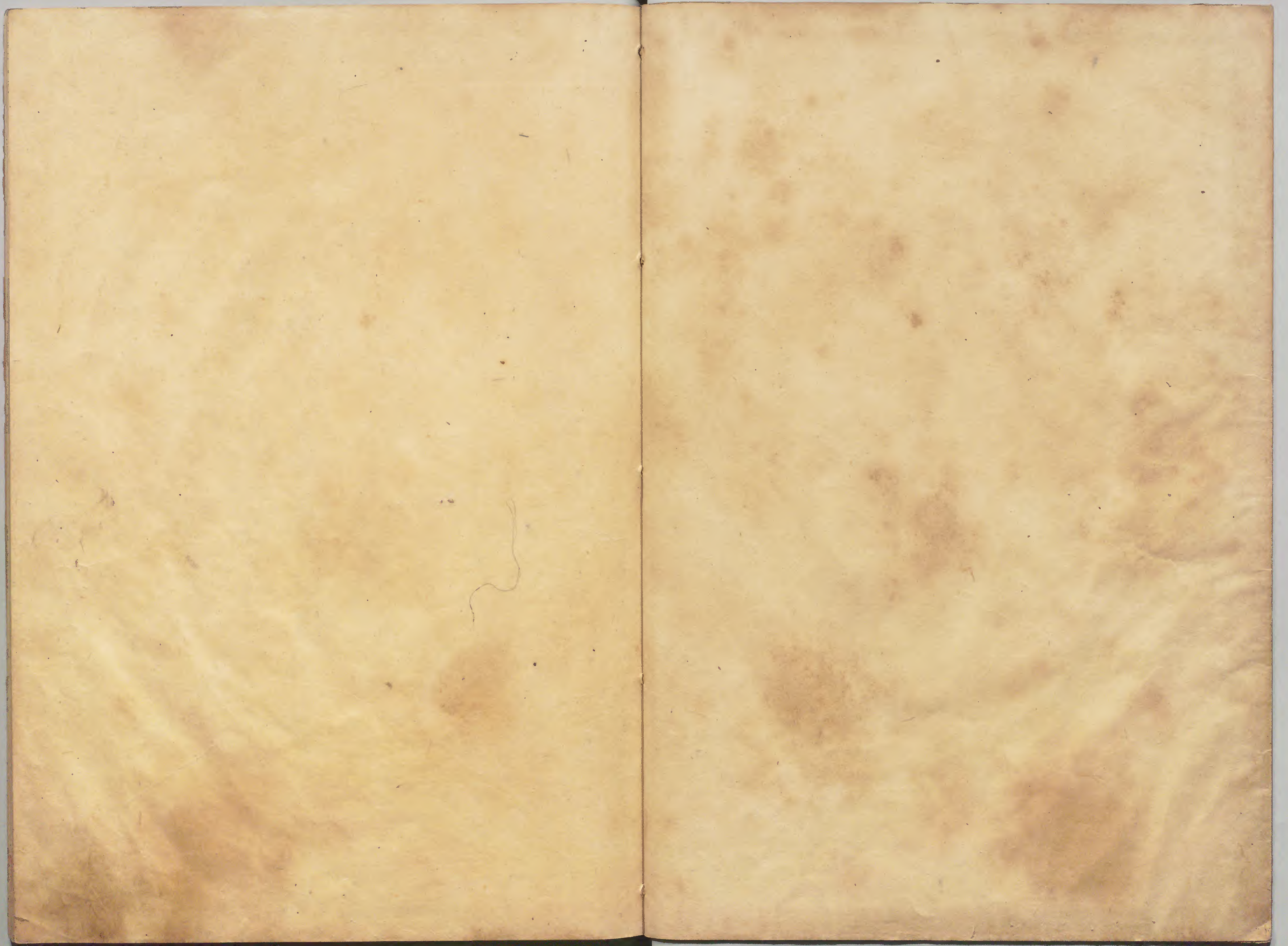


寛永諸家譜

藤原氏甲一冊
山蔭流

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186 (84)		
函號	特	76	1





伊達

寛永諸家系圖傳

藤原氏

山陰流

伊達

甲 小家

淺草文庫

山陰中納言をよりて元祖とす

陸奥守政宗代よりして

松平乃稱号を考へず

天智天皇根命二十二代

大織冠鎌足

中臣連 内大臣

天智天皇八年十月十五日

藤原乃姓をいふ

同十六日薨す 年五十六

淡海公不比等

右大臣

元正天皇の御時右大臣正一位を贈り
す

房前

参議

魚若

右大臣

河内乃大臣と号す

執事取

中務大物

藤嗣

参儀

高房

越前守

山蔭

中納言

淳和天皇御宇天長元年誕生
仁明文徳法和陽成乃御代り此名也

貞観年中京都より上りて

吉田社を立ちて春日大明神を勧修
宇多天皇仁和四年二月甲子遷都す

上紀より年六十五

時長

利仁

鎮守府將軍

鎮守府將軍

有頼 ありより

在衡 ありひら

但馬守 くだまのし

栗田右大臣 あいのさくらだの

通三 とみさん

陸奥守 むつみのし

中正 ちゅうせい

河内守上 かわちのし

左京大夫 さきやうのたふ

播磨守 はりまのし

安親 やすちか

正三侍参議 ただよみさん

為威 たけい

河内守下 かわちのし

越前守 えちぜん

宣任 のたまひ

河内守上 かわちのし

筑前守 つくねのし

肥前守 えちまのし

倭加守 やまがのし

大和守 やまとのし

實宗 まこと

江口位下 えがき

常陸介 ひらのすけ

能登守肥前守 のとうのしゅ ひえんのしゅ

永子孝 ながこ

皇孫文少進 みまろのふみ

家周 いえしゅう

大舍人 おほしやく

光隆 みつたか

侍賢門院北苑人 むすねのむらと

朝宗 あそ

高松院北苑人 たかまつのむらと

文治年中 ぶんじ 中 なかつ 下 した 御 ご 列 れつ 子 こ 下 した 向 むかひ

伴達 ばんだつ の 郡子 ぐんこ 指 さし 宿 しゆく 守 しゅ

宗村

中村常陸入道 法名念為 満勝寺と号す
康元元年十月二日卒す

義廣

粟野法郎 法名大補 法名覺佛
観音堂を建立す 覚仙身長の観音菩薩
像三十三神造立し 出家す 隠居す

政依

法名朝為 東昌寺と号す
光福寺乃五ヶ寺と号す
東福寺正覺庵佛智祥師を傳へて
東昌寺乃開山とす 正安三年七月九日
仙逝七十六歳 遷化
同年同月同日酉の刻 政依卒す

宗鑑 むねのり

小太郎

基宗 もとむね

孫太郎

行宗 ゆきむね

文内大輔

法名 嘉如

貞和四年五月九日 しやうじ 卒 しゆ

宗達 むねたつ

弾正少弼 だんせいしょうぶ

法名 宣叟

喜見寺と号 きけんじとごう

至徳二年六十二歳 しとく 卒 しゆ

政宗 まさむね

大膳大夫 おほのぞうだいふ

法名 儀山 ぎざん

東光寺と号 とうこうじとごう

以時 もち 長井 ながい の店 たね を と 号 なごう と

家と大なる二十二年常より和歌
乃道をこみむ

山家帝と題ししと先歌

山あり乃霧いさかし海ふれ

かみしやこふハ松せのこ

山家帝

中しくしし九折たれみらして

折支よこるわれらうこさ山里

應永二年九月十日より卒

此は紀勝定院殿追悼乃和歌二首と
考す

或古乃あとしをりしめ志こし海の

みらさししじとせりし

朽くそぬししと色かしの世よ

うししかきやれ乃れまふこ

緝紙令泥の法華經をそくし

氏宗 うぢむね

兵部少輔 ひょうぶのすけ

法名東尊 ほうねとうそん

應永十九年七月七日卒 おうえい十九年七月七日卒

持宗 もちむね

大膳大夫 おほのぞのたふ

法名天海宗景 てんかいむねかげ

真常院 まんとくいん

号寸 あ号寸

將軍膳定院殿の浄代より上海 しゅうげんぜんじやういんどのじやうだいより上海

文明元年正月八日卒 ぶんめい元年正月八日卒

成宗 なりむね

兵部少輔 ひょうぶのすけ

法名彌若原 やわがはら

極龍院 ごくりゆういん

号寸 あ号寸

將軍常陸院殿浄代上海文明十三年 しゅうげんじやうりくいんどのじやうだい上海ぶんめいしゅうねん

十月十日京若寸歸王乃日今道 じゅうがつじゅうにちきやうじやうすけかへりやうのみけいみち

上海中 上海ちゆう

都 みやこ

御りしよのこむらさきでうか

尚宗 あきむね

大膳大夫 おおいだんのおとよ 法名香山 くぐん 香檀 かんとん 徳國院 とくごくえん

号 ごう 号 ごう

永正十一年 えいしやうじゅういちねん 五月又日 ごがつまたひ 卒 しゆ 寸

植宗 うゑむね

左京大夫 さきやうのおとよ 法名惠山 ゑさん 圓入 えんげい 知松院 ちまつかん

号 ごう 号 ごう

永禄八年 えいろくはちねん 六月十九日 むつきじゅうくにち 卒 しゆ 寸

晴宗 はるむね

左京大夫 さきやうのおとよ 法名保山 たもやま 道祐 みちすけ 乳湩院 にゅうじゆえん

号 ごう 号 ごう

天正五年 てんしやうごねん 十二月又日子 ふたつきまたひこ 卒 しゆ 寸

禪宗

大京大夫 法名性山受心 覺範寺

少将守

天正十三年十月八日辛酉年以歳

四十二

政宗

權中納言 前陸奥守

天正十六年の夏佐竹義重常陸下野
あまの岳をひき奥列合津の義廣と
おのく仙居安模郡北郡山
上法をいれとるを政宗所領の地
たり河内乃境一軍若とくけく
教ヶ所乃城を師とくまひらとる
うれ勢とらふ一とく色大敵
こい一置新陣をつたぬひさく
お戦園東乃岳つたれく和睦とる

たゞひ一河内道は道より政宗威勢

いづく都鄙小あはれ

日十七年乃夏仙道安後の郡

孫叛乃そのあり政宗これを討じ

とありととて一不日一

誅戮一と陣を今津備後

くはすろれ翌日義廣族とあはて

とありつと橋上京一うた

合戦寸政宗一かれ國府をまら

数千の敵兵と討義廣をぞ没あす

あれよととて今津十餘郡のよ

い

同年仙道あをそよ夏向一伏見川

の城を政宗寸ゆ一仙道七郡も

ゆととととと

政宗いもと園白あを一対面せず

あをるれ名とあを交通せんがあ

一奥列の勢をまらとあ

日上 二

日上 三

豊臣家後継の証

此れを志んくられき秀吉らへび
く細國行の志りと政宗よこまれば

同十八年乃表秀吉関東小田原より

駿河一軍をもちく小糸氏政と

返治一諸公みか一統す奥列の地と

え〜山城郭をとりく〜あ政宗と大崎

岩右山城一り〜着る大崎そのか

此れ較多あてとこあつた

とこの末政宗得治を食く〜あわ

何〜名とあ〜あて相業越前守と
号と

文禄年中秀吉高麗陣として

肥前乃公名護屋におき〜う政宗

朝鮮より入合戦あり〜あつた時

秀吉感状と給ふ〜あつた

今度お令海軍彈正父子及弟儀

要する助合以勝利幸日本軍中

不及海軍之至と考は給ふあ代末

左圖は秀吉の居城と
あつた

あつた

朝鮮陣 七

関山此らも無誠度又是者一也也

文禄四年 八月日未平 秀吉

相模越前守

ろけり秀吉にづゝ 是月すりとる
の僅一編を政宗よりそへる

文禄三年八月秀吉薨逝と遺物と

志々 錦友守乃 殿君を孫へ

同五年上杉景勝謀叛と政宗より

東照大権現のおほせをうけきぬり

景勝家乞うてくぶまはとくあり

白石城と攻めり又景勝が老女に

山城守を引く出羽守殿上り

へ義光をせし義光うせいをふ

政宗とけり一戦も利をたす

敵川 通此年

大権現より小肩衝に茶入と孫へ

同六年武蔵の山久喜地と鷹場

仙臺城と茶入

左衛門右衛門

作をきりて九

を為領寸

同七年奥列文城郡（奥列文城郡）より居城を築仙基（仙基）と号す

同八年

大権現御上御（大権現御上御）と記政宗先駈（政宗先駈）とあり
供養（供養）して参内（参内）

同九年文城郡より八幡宮を修造し
勿（勿）々（々）小園冷寺茶師堂を再興す

同十年二月八日

大権現御上御（大権現御上御）と記政宗先駈（政宗先駈）とあり

抄目録列すあり

同年

右徳院殿御上御（右徳院殿御上御）と記政宗先駈（政宗先駈）とあり
供養（供養）して参内（参内）

同年政宗先駈乃真福を修（政宗先駈乃真福を修）せん
し（し）松崎乃真福寺とあり（松崎乃真福寺とあり）

大伽藍を建（大伽藍を建）ち
同十一年の表常陸國誌が併（同十一年の表常陸國誌が併）と詳（と詳）

皇居修葺 十二

郎尾師成 十四

山上御供養 十五

瑞岩寺建立 十六

大伽藍修葺 十八

願寸

同年

右徳院殿政宗館一渡津あり長光此津
腰物と珍ふまはの御領ありあまこ
あり 目錄別より

同年十二月 作りし政宗が

息女を上総介源忠継より嫁す

同十三年 杉平乃孫号とす海り

侯奥守に任す 奉國老乃 御腰れ物を

洋紙と

同年 塩竈六所此文を再具す

同十五 政宗駿府よりしり

大権現より瑞一 寺々く海の家を記

湯茶入をうまふ 樋口肩衝と号す

同年

右徳院殿政宗館一 津成あり洋紙あり

あまこ ありありと 目錄別より

同十九年の春 作りし 越後

しをもちしこま田城を普徳
あけし記

白蓮院殿うわ守家北清徳物と孫
同年の秋を巨秀頼大坂乃城
ありし礼とをうと改宗

大権現のおひせとくちりき海つと軍勢
をもちり大坂しじふ十月冒
仙臺とて下野乃玉小山と秀頼
乃使者和久事屋集乃尉是成とてそのよ

川あふ和久ひりふりちりき大坂
あき事れとまがし駿動とてきあえ
あけししりし

大権現機嫌しりし改宗しれを
しきやしりしあき海つと
あしりしきりしあしりしと大坂
通しりしあしりしあしりしと
あり改宗しれとあしりしと
使者と監府江戸一まんト又人を

和久子とくつけとくふの駿府
江戸より和久と捕づ支の作あは
ゆー一作豆の三嶋とく和久とく
とく寸三嶋の代官井出取集作野集
あ人信をうあふ海しとく和久とあは
しりとも大坂津田陣以後政事と
なるとあは

此とく大坂をせけと政事陣
場本津今文れあはとくはと十に五剛

余軍現充滿すありとく後者茶磨山

大権現子瑞とくすくゆつり平野豊山

白徳院敷とく瑞とくすくゆつり毎夜

攻てかひひ事なると十二月津

あつひあにとく帰料とく此

候轉れ玉字和嶋を伴達とく為家

しりともあはとく知寸為家とく忠家と

廢先あり

元和元年大坂再乱一政宗出陣の

とて銀子四千六百五十枚余を納めず

五月六日道明寺おりにてふく大坂先平

乃大將後友又吉清あびし藤田輝仁正

等を政宗自ら討とけり此頃其母有教

おありして孫利を坊より翌日進く

大坂乃城一廿ありけり

同年閏六月政宗参議子任す

同二年政宗玉なりありけり

大権現御所側一師ますとらあり

そ海りり駿府一糸勤せんそとて

あはれけり路次一匠師一作と

あひすつこころ一駿府一糸勤

ひひありけりやとて参向一

大権現一御所一とてけり御前遊

めきけりけり此を来をわび給ひ

そのあはれけりけり此を御感あり

柳ヤナギ受う清きよ年とし一いち口くち一いち浦うら一いち年とし政せい宗そう一いち

つふゆつらぬきよの物なり政宗承

くくくけがさのゆかりい海

市邊を清前ふもじりくせお

浦とやいふゆめおき清造物とて

清拙きよさだ此こゝ書か法ぽうととすす

同三年

右みぎ法ほ院いん殿でん清きよ入い海うみ此こゝ政せい宗そう先せん師し也なり

信のぶ年とし一いち参まゐ内うち

同どう年ねん十じゅう二に月げつ十じゅう八はち日にち別べつ所ところ貞まこと宗そうのの清きよ勝かつ

美みをを清きよ以もつ寸すん

同どう五ご年ねん乃なり去さ

右みぎ法ほ院いん殿でん政せい宗そう館くわん一いち渡わた清きよあありり清きよ以もつ物もの

そくくあり目録別一これをもる

同どう年ねん

右みぎ法ほ院いん殿でん清きよ上じやう海うみ此こゝ政せい宗そう先せん師し也なり

信のぶ年とし一いち参まゐ内うち

同どう年ねん清きよ屏びやう風ふうをを清きよ以もつ也なり案あん田でんはは法ほ眼がんが

筆耕北地絵あり

同六年江戸湊城大手北湊川沿地十

三町余餘額一町を以て

同七年乃春改宗額額大よかり

より額子一万千六百枚と相成す

同八年乃秋出羽北國宮上湯改易此

と記作しより額子人較とつる也

同九年

白浪院殿

將軍家湯上湯乃と記改宗先額とて

付在し参内より禁中より

穢系あり改宗を母れ忌ありと参

同十

同年虚堂乃書法を洋紙と

同十二月廿日

白浪院殿改宗額一町を以て海軍の

たまたまのありと目録列しとる

寛永元年二月廿日

將軍家政宗館へたゞ口封ふ河まき乃

寺海家のあり 同録別子まき乃

台徳院殿より 伽羅維一包を洋領と

涉自筆より 書れぬあり

同三年

台徳院殿

將軍家涉上海北と紀政宗先致とて

信守一春内やうく 作より

中納言より 望守時二条北涉城へ

行幸あり

將軍家涉しん乃とあふ涉春内海

ます政宗騎るより 尾垣

同三年三月十二日

台徳院殿政宗館へ 渡涉ありあきとれ

洋領より 別紙より あり

同二十一日

將軍家政宗館へ 渡涉あり北とて

別紙より あり

同六年江戸一浦城芝日比谷日支那の
浦の跡取石垣を修く

同七年四月六日

將軍家政事第一 渡邊あり自宗の

浦腰着をきりしより小うれがりきりしもの

あぢくおしり 日録別よりなる

比と紀政家進物守家此浦腰物あり

同月十日

台徳院殿政事館へ浦蔵あり洋館の

おしり 別録あり

同四年

台徳院殿燕記浦のり

將軍家より銀子二百枚を拜領す

同十年

將軍家より暹羅陽北書紙とす

同年

將軍家浦上流此と紀政家先録して

竹書参内

此年を以て乃玉とて領地加増を許
願は

同十二年正月十六日采母とて
名香の御禮とてすくくすくす

將軍家よりしげあも御自筆に
御書をたしつる所は

同月二十八日仰りしつる二丸を
御茶と献すとのとき院助肩衝に
御茶入と御禮と

同年御いし御きまりの御玉にとき
當麻の御襦物と御紙すまはれり
さし毎度御禮に名香御紙くすく
あげくすくすくす

同十二年正月 日光山へ参詣とて
しつる所は

大権現御年忌の毎度日光社参り
同年江戸よりありし二月に
病より御紙同か一日

將軍家かごけりも政宗館

渡御ありてり其遺例とて

ふりてり政宗感涙をたす

りれりあまごり名醫をあつた

療治す愈この作ありと上使目こよ

きぬりり気るなりとと沙守あり

清惠いとおももまご一家れと

あふりりあれりりあらん

日月二十日薨と歳七十 法若奥山

利云

甚宗

松平隆奥守

母多征東將軍坂上田村丸乃後流將

清顯がひとあり

之歳乃と記しりあま浮きと

大権現乃清前一めりりりりり

清膳物右文字安吉れ清膳着を

白旗院教しらかしと大教おほい啓ひら貞宗さだむね乃すなは津つ腰こし着き
長光ちかひ乃すなは津つ緋物ひものを有あり

同五年一政宗まさむね館たね

白旗院しらかし殿の入い津つかかささまま包ひ永なが乃すなは津つ緋物ひものの物もの
を忠宗ただむねより奉たま

日六年江戸津城つじょう普信ふしん乃すなは時とき大おほ手て此
御門ごもん乃すなは石垣いしがきををけけくく政宗まさむね玉たま子こあり

いいもも忠宗ただむねこれこれををけけくくままかからら
上ありり達たちちめめききははくく少すく城じょう

大俱利迦羅おほぐりやら唐たう光ひかり乃すなは津つ緋物ひものと海うみ乃すなは
くく取と戴たいと

同七年なな表あ頼たの火ひりりかかららりり

銀子ぎんこ四よ千せん六む百ひゃく五ご十じゅう枚まい余あと津つ

領寸

同九年

白旗院殿

將軍家しやうぐん湯ゆ之の海うみ乃すなは紀忠宗きしゆん先ま延のとて
信しん守しゅ泰たい内ない禁きん中ちゆう乃すなは芭蕉布ばしやうふ并ならび

薰物を洋紙寸

同二年十二月廿日

右徳院殿政宗館へ渡御ししとき貞宗
乃涉腰物を忠宗よりへ海へ

寛永元年二月廿日

將軍家政宗館へ在りてをききしと記

一文字乃涉腰物を忠宗に給ふ

同二年七月廿三日貞宗守とありしと記

越前守と号寸此と記

將軍家より涉腰物を取載し

同二年忠宗より下書りし時

右徳院殿より貞宗乃涉腰物を給ふ

將軍家より保昌五郎乃涉腰物を

寄海へ

同二年

右徳院殿

將軍家涉上御乃節先致し給ふ

春内はとき大近清少将子記寸

乃之兒進上の物 正宗乃沖繩物 編

後守部の沖繩物 樋口貞衛の沖茶入

牧溪乃筆唐堂乃讚の云幅一對

同年乃林沖繩物を寄りし物にの時

守家此沖繩物を洋領す

同十五年四月 日光山へ乃返す

東照大権現の沖寶前を洋領す

是ぐに江戸へ奉勅す去年忠宗御代

法水乃一き山一終一とよび進

銀子十一百六十子三百枚を洋領す

同十六年四月十日 任し

越前守をあらはし 佐奥守と号す

此より紀東國光乃沖繩物を洋領す

忠宗進物ハ貞宗乃沖繩物なり

同十七年乃忠宗を主乃と記

上使しし時 越前小十郎江戸より

仙臺より江戸沖繩物を洋領す

同年四月日光山へ奉詣

大権現乃御寶ありあり

同十八年五月に荒川に大権現の御宝ありあり

使として他處より御宝ありあり

召を降る

同二十年五月に御宝ありあり

時御宝ありあり

御宝ありあり

光宗

松平越前守

母

大権現乃御寶ありあり

あり

大権現乃御宝ありあり

大権現乃御宝ありあり

白河院殿御寶ありあり

十二月嫁入りありあり

寛永十六年四月十日御宝ありあり

めききく電城一 沛前くく元服

將軍が沛諱の字とくくすれ克家と

名あり越前ちと号とけと此自家の

沛勝物を沛勝と

家紋二候頭

在京大晴宗代りあうとあ

竹藪を紋とす

政宗 まさむね

陸奥守

仙臺中納言 せんたいのちゆうなごん

伊達 いだて

先祖累代の中緒の忠宗が系譜より

見しころ陸奥守政宗より

松平の称号をたふすといふも

新宗の齋氏をあらはす

秀宗 ひでしゆ

孝江守 曰傳傳塔 陸奥刈田郡子牛乳
陸奥守政宗が子ありて忠宗より庶兄あり
文禄三年 曰歳より奥列 謀るに那
より城列 伏見よりあり秀吉より満より
同四年 秀宗が弟 兼友が母を侍り
とて 秀吉に秀頼を 内此の時侍り
長元三年 六歳より五傳傳塔より

又 秀頼を 内此の時侍り

同三年 石田治部が補三歳 謀叛を是

よりありし 諸公の 人質みか大坂

あり秀宗もまゝに 人質よりありけり

より謀りありしもの ありけり質の

石をありし 政宗と政宗と 同き

せがれ 少くをまゝに 三歳 秀宗が 任

所をありし 幼前中納言 秀家

が 宅より 幼前中納言 秀家 十歳

同七年十二歳乃とき伏見より

東照大権現より一掃一掃とて

同年伏見より江戸より

同十二年

大権現命志くのみまり井伊共部

武政がむすめとて秀宗よ嫁と

為ることありあれり

二月婚礼あり

同十九日大坂御陣のとき

又政宗とおるく本藩今まれ政口

よりあり

同年十二月伊豫の玉乃内宮

十万石の領地をく

元和元年三月より

此年大坂再乱あり

同二年駿奔あり

大権現御石倒乃とき

貞宗の御殿

カキハシ 麻毛の沙馬シマとなす
同五年

白旗院殿沙上カキ海津シ春田ハル乃ノと記し
供せし

同九年

將軍家カミ將軍カミ宣下ノ沙シ春ハル内ウチれレと記し
供せし

寛永三十二年二條乃沙城シロノ新ニ音ハ有リ

將軍家沙シじシひヒしシしシと記し春田ハル内ウチり

高宗タカ供クせし 以モつツひヒ堤ツツ田ツ位イ下カり

叙シせし

同九年

白旗院殿シロ薨シ乃ノ後

將軍家カミ乃ノ銀ギン子コ二千ニ枚マをヲ給クふ

沙シ上カキ海津シ乃ノと記し

~~~~~

大権現

白旗院殿



將軍家より皇子<sup>みこ</sup>湯<sup>ゆ</sup>胎<sup>たい</sup>等<sup>らう</sup>ありけり

清<sup>きよ</sup>子<sup>こ</sup>或<sup>ある</sup>ハ<sup>ハ</sup>涉<sup>せつ</sup>穠<sup>じゆ</sup>物<sup>もの</sup>種<sup>しゆ</sup>々<sup>々</sup>種<sup>しゆ</sup>々<sup>々</sup>種<sup>しゆ</sup>々<sup>々</sup>

忠宗

陸奥守家督<sup>りくおのしやう</sup>宣<sup>のたま</sup>佐<sup>たす</sup>少<sup>すく</sup>物

宗實

左近大夫

母<sup>はは</sup>之<sup>を</sup>井<sup>い</sup>伴<sup>ばん</sup>兵<sup>へい</sup>部<sup>ぶ</sup>少<sup>すく</sup>輔<sup>すけ</sup>直<sup>ちく</sup>政<sup>せい</sup>が<sup>が</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ

夏<sup>なつ</sup>長<sup>なが</sup>十<sup>じゆ</sup>七<sup>しち</sup>日<sup>にち</sup>江<sup>え</sup>戸<sup>と</sup>よ<sup>よ</sup>を<sup>を</sup>む<sup>む</sup>く<sup>く</sup>誕<sup>たん</sup>生<sup>せい</sup>

元和八年十一歳

右近院殿

將軍家と<sup>と</sup>涉<sup>せつ</sup>穠<sup>じゆ</sup>一<sup>いつ</sup>た<sup>た</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>け

寛永<sup>かんえい</sup>日<sup>にち</sup>年<sup>ねん</sup>病<sup>びやう</sup>あり<sup>あり</sup>と<sup>と</sup>涉<sup>せつ</sup>穠<sup>じゆ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>け

之<sup>この</sup>海<sup>うみ</sup>より<sup>より</sup>伴<sup>ばん</sup>穠<sup>じゆ</sup>の<sup>の</sup>字<sup>な</sup>和<sup>わ</sup>清<sup>せい</sup>よ<sup>よ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>け

宗時

左京亮

母<sup>はは</sup>之<sup>を</sup>宗<sup>むね</sup>實<sup>じつ</sup>より<sup>より</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>け

元和<sup>げんわ</sup>え<sup>え</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>江<sup>え</sup>戸<sup>と</sup>よ<sup>よ</sup>を<sup>を</sup>む<sup>む</sup>く<sup>く</sup>誕<sup>たん</sup>生<sup>せい</sup>



同八年一歳より

右法院教

將軍家より賜しし御書

寛永九年御書に依りて

同十一年

將軍家御書に依りて

此より

同十六年御書を以て

字和崎より

女子

兼母より宗実より

女子

鶴松母より宗実より

大松

子腹

百助

別腹より秀宗が

常朽より耐を



子  
す  
寸

長松

あ  
腋

家  
乃  
紋

忠  
家  
子  
た  
か  
し



